

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 120

2010

目 次

第 26 回年次大会参加申し込み等について	2
会長声明～行政刷新会議の「事業仕分け」について～	6
日本中東学会第 15 回公開講演会・実施報告	8
『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会報告	9
第 3 回中東研究世界大会(WOCMES-3)へのパネル派遣について	10
地域研究学会連絡協議会 年次総会の報告	11
韓國中東学会年次大会に参加して	12
国際シンポジウム DIALOGUE ON DEATH AND LIFE: VIEWS FROM EGYPT (『死生をめぐる対話--エジプトからの眺望』)	14
会員の異動	17
寄贈図書	19
事務局より	20
連絡先をご存じないですか	21
編集後記	21

第 26 回年次大会参加申し込み等について

1. 参加および懇親会申し込みについて

日本中東学会第 26 回年次大会への参加申し込みは、参加費の振込みによって行うことができます。

『ニューズレター』本号に、大会への出欠通知、懇親会・弁当（昼食）の申し込みを兼ねた郵便振替用紙が同封されています。大会に参加される方は、この振替用紙をご利用の上、下記の口座に、**4月9日（金）までに参加費をお支払いください**（研究発表に応募された方の参加費納入期限は、後述のとおり、これより早く 2 月末日です。期間を過ぎた場合、発表は取り消しになりますのでご注意ください）。

また、懇親会費、2 日目の弁当代などの納入も同封の振替用紙をご利用ください。2 日目の会場となる中央大学の周辺には、食堂がほとんどありませんのでご注意ください。なお、弁当の当日申し込みはお受けできません。諸費用はできる限り前納でお願い申し上げます。

参加費は 1,000 円、懇親会費は 5,000 円（学生会員は 4,000 円、当日払いは 1,000 円増しとなります。期日を過ぎて振り込まれた場合は、当日 1,000 円を申し受けます。会場準備の都合上どうぞご理解ください）、2 日目弁当代は 1,000 円です。なお、事前にお振込みいただいた諸費用は返却に応じかねますので、ご注意ください。

振込先（郵便振替口座）

口座番号 00150-1-639075

口座名称 日本中東学会第 26 回年次大会実行委員会

（ニューズレター同封の振替用紙をご利用ください。）

2. 託児所の設置について

託児所利用の希望は、引き続き受け付けております。大会当日に託児所の利用を希望される方がございましたら、準備の都合上、早めにご連絡ください。最終的な締切は 2010 年 3 月 31 日（水）の予定です。

託児所の費用については、託児所会計の前年度からの繰越金を充当する予定ですが、利用者の方に利用時間に応じて多少のご負担をお願いいたします。

3. 研究発表について

2日目の研究発表につきましては、60件の応募がありました。多数のご応募をいただき、誠にありがとうございます。以下に発表者の一覧を掲載いたします。発表の順番などはこれから検討し、正式なプログラムを作成いたします。また、今後発表予定者の都合などによる変更の可能性があります。よろしくご了解ください。

最終的なプログラム、会場近郊のホテル案内、会場への交通案内、総会議決の委任状などは3月下旬にお手元にお届けする予定です。

4. 発表者リスト（五十音順）

研究発表（個人）

- | | |
|----------|--|
| アーデル・アミン | 比較研究視点における日本とエジプトの言語改革—日本の国語改革モデルはアラビア語圏の言語政策への応用が可能か— |
| 荒井 康一 | トルコ共和国初期における右派と左派の『農民主義』—アトスズと Kadro を中心に— |
| 石川 基樹 | 地域住民における対イスラーム・ムスリム意識の規定要因—岐阜市調査の事例より— |
| 磯貝 真澄 | 19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域におけるマドラサ教育 |
| 今井 静 | ヨルダンおよび西岸地区における国籍とパスポートの実態 |
| 今井 真士 | 名目的な民主主義的制度は権威主義体制下の政党競争にいかん作用しうるか？ |
| 岩本 佳子 | 羊を持たない「遊牧民」—16世紀アダナ地域における遊牧民定住化をめぐる—考察— |
| 大河原 知樹 | フランス委任統治期シリアにおける「結婚力」の研究（仮題） |
| 大塚 修 | ペルシア語「系譜書」研究序説—『選史』末文の「系譜書」を中心に— |
| 小川 浩史 | ナセリズムの歴史的変容—民族解放闘争の形成とその変容（仮題）— |
| 岡井 宏文 | 地域住民における対イスラーム・ムスリム意識の諸類型—岐阜市調査の事例より— |

- 小笠原 弘幸 トルコ共和国公定歴史学におけるオスマン帝国史—歴史意識とアイデンティティーの検討—
- 岡戸 真幸 アレクサンドリアのソハーグ県同郷者団体の現状分析—都市における同郷者団体の意義について—
- 岡野内 正 パレスチナとイスラエルからのグローバル・ベーシック・インカムを導入—テロ防止・紛争管理への新しいアプローチ—
- 粕谷 元 1923年のトルコにおけるカリフ制論議
- 金谷 美紗 脆弱な権威主義体制の安定性—エジプトにおける労働運動を事例に—
- 亀谷 学 アッバース朝におけるカリフのラカブとマフディー
- 蒲生 裕恵 占領下の日常生活—パレスチナに生きる女性たち—
- 河原 弥生 ワリー・ハーン・トラの「聖戦」に関する—考察：ロシア帝国併合期コーカンド・ハーン国における—スーフイーの抵抗運動—
- 金城 美幸 パレスチナ人社会におけるデイル・ヤーシーン事件の記憶形成（仮題）
- 熊倉 和歌子 マムルーク朝後期エジプトの土地調査記録—Tuhfaの再検討—
- 黒宮 貴義 中東における天然資源の存在と経済発展の関係（仮題）
- 小島 宏 ムスリム移民におけるイスラーム信仰・実践の関連要因—日欧比較分析—
- 今野 泰三 イスラエルによるヨルダン川西岸地区の分断と植民化—政治地理学の主権論による分析—
- 佐藤 紀子 集団統合の原理と内包するアイデンティティーの多様性—シリア正教会教徒の事例—
- 佐原 徹哉 1909年アダナ事件と行政当局の対応
- シナン・レヴァント 戦前期日本における汎ツラン主義—大陸西部進出論理の展開—
- 柴田 英知 開発現象と地域研究—開発民俗学の視角から—
- 須永 恵美子 南アジアにおけるイスラーム国家論：パキスタンを事例に
- 鷺見 朗子・ 日本人大学生におけるアラビア語学習とアラブ文化へ興味
- 鷺見 克典
- 高橋 圭 20世紀のエジプトの「新しい」スーフイズム—ムハンマド・タウフィーク・バクリーのタリーカ改革が目指したもの—

店田 廣文	日本のムスリムコミュニティと地域社会—岐阜市における「外国人に関する意識調査」調査結果より—
田浪 亜央江	アズミー・ビシャーラの思想と文学
田村 行生	9-12 世紀のマー・ワラーア・アンナフルにおけるペルシア語
ダルウィッシュ ホサム	The Impact of Changing Electoral Institutions on Party System and Determinants of Electoral Participation and Party Competition in Egypt (1984 – 2005)
千葉 悠志	エジプトにおける放送メディアの変容—イスラーム復興を中心として—
辻上 奈美江	サウジアラビアにおける罪と罰—ジェンダーと正義の文化的規範—
椿原 敦子	ロサンゼルスにおけるイラン人ムスリムの宗教実践
飛内 悠子	スーダン共和国ハルツームにおける国内避難民のネットワーク構築—聖公会を介して—
登利谷 正人	アフガニスタン・英領インド国境間のパシュトゥーン部族勢力—Lalpura を中心に—
中野 さやか	宮廷文化の形成者・伝承者としてのナディーム論
中村 妙子	アレppoの政権交替—シリア・セルジューク朝からザンギー朝へ
奈良本 英佑	イギリスの中東におけるプロパガンダ放送
野口 舞子	ムラービト朝のアンダルス支配—アンダルスのウラマーとの関係から
濱崎 友絵	「ペンタトニズム理論」考—トルコ共和国建国期の音楽にみる汎トルコ主義の一断面—
平松 亜衣子	現代クウェート議会における投資のイスラーム適格性をめぐる議論
松井 真子	18 世紀オスマン帝国における通商条約とカピチュレーションの最恵国条項
松本 隆志	タバリーの『歴史』における歴史伝承の用法に関する一考察
三沢 伸生	エーゲ海における平明丸抑留事件 (1921 年)
モハメド・オマル・アブディン	スーダン南部住民自決権が民主化に寄与するか?
森岩 紀賢	アッパースー世時代におけるシャームルーの活動
役重 善洋	矢内原忠雄の植民政策論とシオニズム

- 安田 慎 現代シリアにおけるシーア派参詣 (仮題)
 横内 吾郎 ウマイヤ朝後期のメディナ統治
 横田 吉昭 近代国民国家トルコ共和国を表象した漫画家 (仮題)
 吉田 世津子 中央アジア・クルグズスタン (キルギス) 北部農村における
 イスラーム宗教職能者 — 「モルド」・カテゴリーとその
 変容—
 Yong-Ben Lee 中東における中国の影響力拡大と変貌する中洋国際政治
 若桑 遼 1930 年代後半のチュニジア人ウラマー— 『ザイトゥーナ
 誌 (al-Majalla al-Zaytuniya)』 の発刊期 (1936 年 7 月 -
 1939 年 10 月) を焦点として—
 和気 太司 湾岸諸国における高等教育の発展—サウジアラビアとU
 AEを中心に—
 渡邊 祥子 アルジェリア・ウラマー協会の「自由アラブ教育」運動

企画セッション

- 岡 真理 How Does an Orient Meet another Orient: Reception of
 Modern Middle Eastern Literature in Japan
 加藤 博 世論調査に基づくアラブ諸国のアイデンティティと対
 外意識
 縄田 浩志 石油時代・中東における薪炭利用、森林保全、植林活動の
 課題—地域住民とビャクシン、アカシア、マングローブと
 の関わりの事例研究から

以上

(松田 俊道)

会長声明～行政刷新会議の「事業仕分け」について～

2009 年 11 月の行政刷新会議の事業仕分けによる学術研究推進関連予算の縮減
 に関して、長期的視野に立った学術研究振興政策の必要性の観点から、会長声明
 を発表いたしました。主に若手研究に言及する形で、行政刷新会議への送付と、
 文科省の担当宛に送付も行いました。以下に会長声明の全文を掲載します。学会
 ホームページには、「会長より」のページを設けて、会長声明および会員への呼び

かけ、会員からの投稿を掲載しております。

(店田 廣文)

2009年12月8日

「長期的視野に立った学術研究振興政策の必要性に関する会長声明」

日本中東学会会長 長沢栄治

さる11月11日から27日にかけて、行政刷新会議ワーキンググループによる事業仕分けが実施され、現在、その結果に基づく2010年度予算の編成作業が進められております。

言うまでもなく、国費の適正な支出を図る手段としての事業仕分けについて、一国民としてその効用を認めるにやぶさかではありませんが、すでに多くの学協会、研究教育機関等が危惧を表明しているように、高等教育および学術研究分野において、近視眼的な観点から仕分け作業が行われたことに、強い危機感を感ぜざるをえません。

とりわけ、文部科学省担当の事業である競争的資金（若手研究）（事業番号3-21）に関する大幅な予算縮減の判断は、きわめて憂慮されるところです。本学会が専門とする中東の地域研究は発展途上の分野であり、学問分野としての高度化の必要性は高く、政治、経済、文化交流などの諸分野に対する応用の豊かな可能性を有していますが、いまだ若い分野であるため研究者は不足しており、若手研究者育成は急務であって、支援の縮減が適切とはとうてい考えられません。同様に、競争的資金（外国人特別研究員・研究者招致）（事業番号3-22）および競争的資金（女性研究者支援）（事業番号3-39）の縮減も、時代に逆行する判断と言わざるをえません。

人文科学・社会科学の分野における研究の成果は、短期的に目に見える形で現れるとは限りませんが、それらの研究の蓄積が全体としての国民の知の水準を支える根幹に関わっていることは明白です。縮減の対象となった競争的資金の獲得競争率はきわめて高く、過去に選抜された研究者は着実にその投資に応える研究をなしてまいりました。しかも、中東研究を専門とする若手研究者には、通常、数年にわたる現地での調査研究が求められ、多くの若手が、ほぼ例外なく大学院の標準修業年限を超えてなお学業を継続せざるをえず、このような厳しい条件を承知の上で、粘り強く研究に取り組んでおります。これらの真摯な取り組みに対し、支援策をあたかも雇用対策や生活補助であるかのごとくみなす仕分け担当者の見識は、まったくもって不十分といわなくてはなりません。

国際的な水準に照らして、我が国の高等教育および学術研究推進の財政支援が、経済活動の水準等に比して充分といえないことは周知の事実です。今回の事業仕分けに示されたような認識の低さが、政財界一般に共有されていることが、その根本的な原因であるのではないと信じて、日本中東学会を代表し、中長期的視野に立った高等教育および学術研究推進のための施策を強く要望いたします。

日本中東学会第 15 回公開講演会・実施報告

2009 年 10 月 24 日（土）の午後 1 時半から 6 時まで、札幌市の北海道大学・学術交流会館にて 15 回目の公開講演会「中東と中央ユーラシア——資源、民族問題、イスラーム」を開催しました。150 人収容可能な会場が、ほぼ満席となる盛会でした。いうまでもなく中東には日本のみならず世界の多くの国がエネルギー資源を依存しています。今回は、中東に隣接してプレゼンスを強めつつある中央アジアを視野に入れて、エネルギー資源の開発問題に、地域の政治・社会・文化的な要素を絡めて考える、そのような機会を提供することを目指しました。

長沢栄治会長による日本中東学会の紹介を含めた開会の辞の後、司会の黒木が趣旨説明を行い、引き続いて清水学会員による最初の講演「グローバル化の波とユーラシア大陸南部の再編成」が行われました。中東と中央アジアの双方に甚大な影響を及ぼしつつあるアフガニスタン・パキスタンの不安定な状況を、丁寧に解説して頂きました。第 2 の講演、本村眞澄氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）による「ロシアの石油・天然ガス開発と輸送問題」は、石油と天然ガスの双方で大きな埋蔵・生産量を誇るロシアが、その国土と周辺地域にどのようにパイプラインを張り巡らせてきたか、そこにどのような問題が見られるのか、将来の展望も含めてわかりやすく示して頂くものでした。第 3 の講演は宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター）による「中央アジアと中東を結ぶものと分けるもの——歴史・民族・イスラーム」では、中央アジア諸国がたどってきた発展過程を民族問題とイスラームを軸に、エネルギー問題の舞台をなす中東・中央アジア両地域の歴史的・文化的な背景に光が当てられました。最後の講演、保坂修司会員による「変容するサウジアラビア社会」では、世界最大の産油国が直面する様々な問題が、日常生活のレベルから国際政治のレベルまでダイナミックに描き出されました。

休憩の後、加藤博会員によるコメント「“アジアのなかの中東”の視点から」があり、中東、日本・東アジア、欧米の間の交易構造を説明する「オイル・トリアングル」の概念を中心に、新興国台頭の問題も含めて、エネルギー問題を巨

視的に位置づけて頂きました。もう一つ、岩下明裕氏（北海道大学スラブ研究センター）のコメント「将来のユーラシア国際秩序の視点から」は、4人のパネリストによる講演それぞれに対して大変刺激的な論評を行って頂いたもので、引き続き行われた質疑応答に対する格好の呼び水となりました。

会場参加者にアンケートをとりましたが、満足する内容だったとの好意的な評価がほとんどでした。一方で、内容が盛り沢山すぎた、もっと長い時間をかけて一つ一つの講演をじっくり聴きたかった、といった意見もありました。

企画者として至らぬ点が多かったことを反省していますが、素晴らしい講演・コメントを頂いた6人の先生方に厚く御礼申し上げたく存じます。

今回は北海道大学スラブ研究センターに後援をお願いしましたが、実質的には共催というべき多大なご支援を頂きました。また、北海道大学の太田敬子会員、守川知子会員にも貴重なお力添えを頂きました。関係の皆様深く感謝申し上げる次第です。

（黒木 英充）



『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会報告

『日本中東学会年報』(AJAMES) 編集委員会より、ご報告いたします。

1. 25-2号刊行のお知らせ

すでにお手元に届いていることと思いますが、25-2号が2009年12月に刊行されました。論文1作(和文)、研究ノート1作(英文)、資料紹介1作(和文)、書評3作(和文2作、英文1作)、博士論文要旨2作(英語)が掲載されています。会員の方で冊子がお手元に届いていない方がおられましたら、事務局にご一報ください。

2. 26-1号編集中

現在、26-1号の編集作業を鋭意進めております。今年6月の刊行予定です。

3. 26-2号投稿締切のお知らせ

26-2号(2010年12月刊行予定)の投稿締切は6月20日です。論文、研究ノート、書評、博士論文要旨など、各カテゴリへの投稿をお待ちしております。ま

た英文による特集の企画がありましたら、是非ご投稿下さい。

4. 本誌に関するお問い合わせ

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下の通りです。

〒183-8534 府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@tufs.ac.jp

(青山 弘之)

第3回中東研究世界大会(WOCMES-3)へのパネル派遣について

118号のニューズレターでお知らせしたとおり、2010年7月19-24日にバルセロナ(スペイン)で開催される第3回中東研究世界大会(The Third World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES-3)に、JAMESとして参加する予定で準備を進めています。JAMESでは、2002年マインツ(ドイツ)、2006年アンマン(ヨルダン)の過去2回のWOCMESにおいても、学会としてパネルを組んでおり、今回は3回目の参加となります。

118号で、JAMESとしてのパネル組織について募集したところ、4件の応募があり、慎重な審査の結果、4件とも採択としました。それを元に、下記のような内容のパネルを、JAMESとして準備しています。

1. パネル総合タイトル

「2つの海の出会うところ—多元的な中東理解を求めて」(Meeting Place of Two Oceans (*Majma' al-Baḥrayn*): Multi-dimensional Understanding of Middle East)

2. セッション名および応募者(順不同)

統一性と多様性の中の西方イスラーム世界(私市正年・佐藤健太郎)

世論調査に基づくアラブ諸国のアイデンティティと対外意識(加藤博)

日本における中東現代文学の受容と展望(鶴戸聡)

現代のスーフィーと聖者—政府と大衆のはざままで(高橋圭・高尾賢一郎)

JAMES パネルの派遣にあたっては、国際交流基金の知的交流会議助成プログラムに資金的援助を申請しており、4月には採否の通知がある予定です。

3. 個人参加

個人参加の申し込みは、来年7月10日が〆切で、
http://wocmes.iemed.org/en/registration_eng
から申し込みができます。

また、パネル申込期限は昨年12月15日に設定されていましたが、締切日直前に3月1日まで延期されました。JAMES パネルとしての申込は締め切っておりますが、個人ベースでの積極的な参加をお勧めいたします。パネル申込は下記のURLから可能です。

<http://wocmes.iemed.org/en/pre-organized-panels/subseccio>

(東長 靖)

地域研究学会連絡協議会 年次総会の報告

昨年11月21日に東京大学本郷キャンパスにおいて、地域研究学会連絡協議会(JCASA)の年次総会が行われた。日本中東学会は本協議会の設立に深くかかわっており、そのため第3代の事務局を2008年11月より(実際には、種々の都合ゆえ夏頃から)担当してきた。その任期も満了に近づき、今回は日本中東学会が事務局を担当する最後の総会となった。

日本中東学会が事務局を担当して以来、故大塚和夫理事が事務局長、筆者が事務局を務めてきたが、一昨年秋に大塚氏が病に倒れてからは、非力ながら筆者が交代して事務局長を務めてきた。その大塚氏を昨春に喪うとは、全く思いもよらぬ悲痛事であった。今回、日本中東学会側からは筆者と黒木英充理事が総会に参加した。

総会は冒頭、大塚氏の死を悼んで黙祷を捧げることから始まった。加藤普章氏(大東文化大学・前々事務局長)の司会のもと、筆者の方から活動・事業報告として、ニューズレター第3号の刊行、同第4号の編集作業、日本学術会議・地域研究委員会の作成文書に対する本協議会の検討会、科学技術振興機構による学会誌の遡及電子化、各種アンケートへの対応などについて、報告を連ねた。さらに会計報告を続けた後、オブザーバー参加された油井大三郎氏(日本学術会議地域研究委員会委員長/東京女子大学)の方から、日本学術会議地域研究委員会の活動状況について、同委員会が現在取りまとめつつある『日本の展望-地域研究からの提言

—』を中心に詳細な報告がなされた。昨年、本協議会も同文書の作成過程で、独自に検討会を行ってコメントを伝えたが、それも最終的には取り入れられたとのことであった。この場でも、多少の議論が加えられた。

審議事項の方で、協議会にとって最大の案件は事務局の(日本中東学会からの)交代であった。結論から言うと、紆余曲折を経て、東南アジア学会が新事務局を担当することとなった。日本中東学会は、今後、幹事学会の一つとして、協議会の活動を支えてゆくこととなる。なお、2010年1月の現時点では、事務作業全体の移行が完了しておらず、一部の業務は引き継ぎ中である。

また、全体として最大の議題となったのは、行政刷新会議によるいわゆる「事業仕分け」による悪影響であった。とくに、若手研究者育成に関わる競争的資金の大幅な縮減要求に対し、協議会として不適切であると憂慮する要望書の提出が決議された。そして後日、日本中東学会をはじめ、本協議会に属する各学協会の連名で、実際に要望書は提出された。

筆者としては、大塚氏の不慮の死にもかかわらず、何とか事務局を務め上げることができ、世界におられる氏にこれで何とか報告できるかと、ささやかな安堵を覚えている。

なお、本協議会のニューズレター第3号は協議会のホームページ(<http://www.jcas.jp/asjcasa/index-j.html>)でご覧いただけます。地域研究全般や日本中東学会関連の記事も多く含まれておりますので、一瞥いただければ幸いです。

(大稔 哲也)

韓国中東学会年次大会に参加して

2009年10月8日早朝、暴風雨の中、韓国中東学会年次大会に参加するために自宅を出た。同日、運悪く台風18号が関東地方を直撃したからであった。飛行機が飛ぶかどうか危ぶまれたが、運休情報も流されていなかったため、とにかく羽田空港に向かったのである。ソウル金浦空港行きJL8831便は暴風の中、数時間遅れで羽田を出発した。ソウルで待っている韓国側の出迎えの方へのつけから迷惑をおかけすることになった。ソウルは東京とは違いよく晴れており、深い青色の秋空が広がっていた。今回は長沢栄治会長とともに理事会の国際交流委員として参加した。

韓国中東学会年次大会は韓国外務省外務国家安全研究所(Institute of Foreign Affairs and National Security: IFANS)との共催でソウルの中心街に位置するロッテ・ホテルを会場として開催された。会議の正式名称はThe 6th Forum for Korean-Middle East Cooperation-2009 IFNAS-KAMES Joint International

Conference である。日本中東学会年次大会との大きな違いは外務省と共催している点である。

公式日程はわれわれが到着した夕刻の歓迎レセプションから始まった。ここですべての参加者と顔を合わせるようになった。Lee 会長をはじめとして多くの KAME S 側の知己と挨拶を交わした。レセプション後は長沢会長とともに Hah プサン外国語大学教授と一献を傾けて旧交を温めることになった。

大会自体は翌日の 9 日にロッテ・ホテルの広間で開催された。午前中はまず、二人の来賓による基調講演が行なわれた。最初が国防次官補やサウジアラビア大使を歴任した Chas W. Freeman Jr.氏による“U.S. Policy and the Search for Peace in the Middle East”という演題の基調講演であった。次の基調講演は元クウェイト情報文化相で現在はクウェイト大学教授である Saad Al-Ajmi 氏による“Socio-cultural Changes and the Future of the Middle East”であった。続けて、二つのパネル・ディスカッションが行われた。最初が安全保障問題に関するパネルで“Iran, Iraq, Palestine: New Dynamics and the Future”と題するもので 4 名のパネリストから報告が行われた。次に午後に入って、中東の政治経済に関するパネル“Searching for the Peace and Prosperity in the Middle East: beyond Oil Era”が行われ、5 名が報告して 5 名のディスカッサントが討論した。午後の後半は並行セッションとなり、それまでの広間が二分割されて、長沢会長が司会した“Cultural Heritage of the Middle East”と私自身が報告を行った“Culture, Media, and Literature of the Middle East”が同時に行なわれた。最後に夜にお別れの晩餐会が催された。丸一日の会議はたいへん過密なスケジュールであったが、内容的には充実したものだ。

会議における個別の報告等の詳細については省略して、会議自体の全体的な印象についてだけ述べてみたい。まず、その規模といい、豪華さといい、日本中東学会の年次大会とは比較にならないという点である。今回の会議はロッテ・ホテルというソウルの最高級ホテルで開催され、レセプションも同ホテルで行なわれ、招聘されたゲストも同ホテルに宿泊したわけであるが、まさに外務省と共催して財政的な支援があったからこそ可能になったのであろう。学会が外務省と共催して年次大会を開催することはもちろん一長一短があり、軽々にはその是非を云々することができないのはもちろんである。少なくともこれまで政策提言などからは一定の距離を置いてきた日本中東学会とは違い、韓国中東学会は韓国外務省と積極的に協力関係を築いている。このような韓国中東学会年次大会の活況振りを目の当たりにすると、日本中東学会も韓国中東学会を範とするかどうかは別として、日本中東学会の向かうべき方向性について学会として一度真剣に議論する時期に来ているのかもしれない。

次に、中東や欧米から著名なゲストを多数招いてパネルを組んで議論するとい

う試み自体は知的にたいへん刺激されるものであり、議論の楽しさ自体を満喫することができた。この会議には中東学会関係者以外にも一般の人びとを含めて多数参加しており、このような会議のあり方は韓国社会における韓国中東学会の評価を高める効果があることは間違いない。研究者だけではなく、現役の外交官、ジャーナリスト、NGO 関係者などが一堂に会して自由に意見を交わすということは、社会に対して閉鎖的になりがちな学会自体の活性化をもたらすことになるろう。

一長一短の「短」の方であるが、中東や欧米から豪華なゲストを多数招いて一大イベントとして学会の年次大会を行なうことは若手研究者の報告の機会が減ってしまう懸念がある。実際、学術報告は午後の後半に行なわれた並行セッションだけであり、それも1時間50分のあいだに8~10名が報告し、4~5名のディスカッサントがコメントするというたいへんタイトなものであった。やはりこの問題点は何とか解消しなければ、学会の年次大会としてのあり方自体が問われることになるろう。

いずれにせよ、韓国中東学会の運営に当たってのロジスティクスはたいへんしっかりしており、韓国の方々のホスピタリティもあって、たいへん楽しくかつ有意義な会議であった。最後に、この場を借りて、韓国中東学会および韓国外務省外務国家安全研究所の関係者の方々に心より感謝申し上げたい。

(臼杵 陽)

国際シンポジウム Dialogue on Death and Life: Views from Egypt

(『死生をめぐる対話—エジプトからの眺望』)

東京大学を中心とする GCOE プログラム「死生学の構築と展開」は、昨年 9 月 29 日から 10 月 4 日にかけて、エジプト・アラブ共和国のカイロとアレクサンドリアにおいて、標記の国際シンポジウムを主催した。エジプト文化省の全面的支援のもと、エジプト高等文化評議会、アレクサンドリア図書館 Bibliotheca Alexandrina、NIHU イスラーム地域研究プログラム、日本学術振興会カイロ研究連絡センター、カイロ大学文学部社会調査センターとの共催である。この他に、在エジプト日本大使館からも協力を得た。

本シンポジウムの準備がかなり進展したところで、NIHU イスラーム地域研究本体の国際会議開催もこの 2 ヶ月後に同じくカイロで開催されることとなり、若干の混乱も予想されたが、杞憂であった。両者の性格の違いは明白であり、逆にこの死生学シンポジウム実行委員会の主たる者たち(A.ザーイド氏等)はNIHUの会議にも参加協力し、人脈やノウハウの一部は引継がれたと思う。

今回のシンポジウムは、死生学プログラムにとって初めての中東・イスラーム圏における研究会議であったばかりでなく、日本とエジプトとの間で相互が負担を全て平等に(経済面も含む)分かち合いつつ行われた、少なくとも文系(日本語学科以外を相手とする)における史上初めての本格的学術会議であったと思われる。その意味では、両国間の学術・文化交流の転換点として評価され得よう。また、中東のムスリムやコプト・キリスト教徒との死生学を通じた対話、アレクサンドリア市民やエジプト民俗学界との本格的な知的交流と言う観点からも、極めて貴重な試みとなった。行程を概覧すると、以下の通りである。

【ファールーク・ホスニー文化大臣主催レセプションと開会セッション】

〈スピーチ〉 イマード・アブー・ガズイー (エジプト文化省高等文化評議会)、
島藺進(東京大学/宗教学)、岸守一(日本大使館広報文化センター長)

【カイロ・シンポジウム】 於 エジプト文化省高等文化評議会国際会議場

〈スピーチ〉 石川薫(在エジプト日本国大使)、島藺進

〈基調講演〉 アフマド・ザード(カイロ大学前文学部長/社会学)、町田宗鳳(広
島大学/宗教学)

〈コメント〉 ハサン・ハナフィー(カイロ大学/哲学)、大稔哲也(東京大学/歴史学)

〈第1セッション〉「現世と来世：哲学・神学・宗教」司会：柳橋博之(東京大学
/イスラム法)、

発表：吉田京子(GCOE 研究員/シーア派思想)、鈴木泉(東京大学/哲学)、ハー
ラ・フアード(カイロ大学/スーフィー哲学)

〈第2セッション〉「靈魂と死後の生」司会：ムハンマド・アフィーフィー(カイ
ロ大学/歴史学)、

発表：嶋内博愛(GCOE 研究員/ドイツ民俗学)、サミーフ・シャアラーン(芸術
アカデミー民衆芸能高等研究所長/民俗学)、アフマド・ムルスィー(カイロ
大学/民俗学)

〈総合討論〉 司会：アフマド・ザード、大稔哲也 〈謝辞〉 大稔哲也

【アレクサンドリア・シンポジウム】 於 アレクサンドリア図書館 Delegates' Hall

〈オープニング・セッション〉 ハーリド・アザブ(アレクサンドリア図書館広報セ
ンター長/イスラーム考古学)、ヤフヤー・ザキー(同図書館学術文化部門長/
アレクサンドリア大学前医学部長)、アシュラフ・ファッラージュ(同大学文
学部長/言語学)、大石悠二(日本学術振興会カイロ研究連絡センター長)、島

菌進

〈基調講演〉 ガリーラ・アル・カーディー(フランス開発科学研究所/都市工学)

〈第1セッション〉「死生と造形文化」司会：アフマド・マンスール(アレクサンドリア図書館/考古学)、発表：ルワイ・マフムード(同図書館書道センター長/考古学)、ハーリド・アザブ、秋山聰(東京大学/西洋美術史)、富澤かな(GCOE 研究員/インド宗教研究)

〈第2セッション〉「死者と身体性」司会：鈴木泉、発表：守川知子(北海道大学/イラン史)、藤崎衛(GCOE 研究員/西洋中世史)、ファールーク・ムスタファー(アレクサンドリア大学/社会人類学)、マージド・アッラーヒブ(エジプト遺産保存協会/コプト建築)

〈第3セッション〉「法から見た死生」司会：サイード・アッダッカーク(アレクサンドリア大学前副学長)、発表：ムハンマド・カマル・アッディーン(同大学/イスラム法)、柳橋博之、マジューディー・ジルジス(カフル・アッシャイフ大学/コプト史)

〈スライド・ショー〉 マンスール・ウスマーン(ワーディー・ジャディーード考古局長)

〈総合討論〉 司会：ルワイ・マフムード、町田宗鳳、〈謝辞〉大稔哲也

この他に、ナイル川船上や地中海に臨む食堂での懇親や、カイロ・アレクサンドリアにおける多種の死生学関連の見学、アレクサンドリア図書館見学など、行事は夜半まで満載であった。

これら全ての講演・報告者や司会者も、エジプトと日本でほぼ等分され、いずれの会場においても現地聴衆を含めた議論が沸騰し、予定の時限を超過した。また、負担平等を貫いたゆえ、日本側としては破格の低予算で運営することが可能となった。そして、日本からエジプトへ派遣されたメンバーは僅か11名に過ぎなかったが、延べ参加者は約350人にも達したであろうか。その中からは、他のアラブ諸国からの発表希望者や日本で死生学を学びたいという者まで現れた。

さらに驚いたのは、マスコミの取材攻勢である。TV(8局以上)、ラジオ(4局)、新聞・雑誌(30紙以上)の取材攻勢が続いたが、その全てには対応し切れぬ程であった。この反響にも鑑み、2011年には日本でシンポジウムの続編を行うことが既に決定されている。なお、会議の詳細については、死生学のDALSニューズレター24号(<http://www.lu-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>で閲覧可能)をご覧ください。

(大稔 哲也)

会員の異動

【新入会員】

鮎合 真介

石川 基樹

石山 俊

磯貝 真澄

井上 ひかり

今野 泰三

川村 藍

木村 有里

近藤 重人

須永 恵美子

中野 さやか

中村 亮

野口 舞子

松本 隆志

星 光孝

安田 慎

Mohamed Omer Abdin

Sinan Levent

【所属先・連絡先の訂正・変更】

新井 春美

熊倉 和歌子

佐藤 伸

鈴木 恵美

高岩 伸任

爲永 憲司

福富 満久

森田 昌宏

李知妍

寄贈図書

【単行本】

横田貴之『イスラームを知る 10 原理主義の潮流：ムスリム同胞団』山川出版社、2009年。

【逐次刊行物】

『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第23巻、岡山市オリエント美術館、2009年。

『季刊アラブ』No.131 日本アラブ協会、2009年。

『東シベリア地域における動物群集の多様性と保全に関する研究』国際地域研究所叢書、第23号、日本大学生物資源科学部国際地域研究所、2009年。

『民族紛争の背景に関する地政学的研究』 Vol.8 大阪大学世界言語研究センター、
2009年。

Acta Orientalia: Academiae Scientiarum Hungaricae, vol. 62, no. 1-2, Akademiai Kiado,
2009.

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, vol. 72, no.3, Cambridge University
Press, 2009.

事務局より

2010年最初のニューズレターをお届けします。本年は、年次大会に加えて、中東研究世界大会など関係する国際会議も多数予定されております。学会事務局の仕事も、ますます繁忙となることが予想されますが、これまで事務局補佐としてご活躍いただいた錦田愛子会員が異動されることとなりました。これまでのご協力に厚く御礼申し上げますとともに、新天地での一層のご活躍をお祈り申し上げます。これに伴い、新たに事務局要員を増員して、貫井万里会員には引き続き重要な部分でのご協力を仰ぎながら事務局運営に努めて行く所存です。今後とも、会員の皆様にも学会活動へのさらなるご協力をお願い申し上げます。

(1) 会費納入口座についてのお願い

本学会では会費前納制を取っておりますが、現在のところ、2010年度会費の納入率は、58%にとどまっております。年度末に向けて、速やかな納入を是非ともお願い申し上げます。

なお、納入口座についてお知らせします。現在、三井住友銀行口座、ゆうちょ銀行口座、郵便振替口座の3つを用意しておりますが、このうち事務局による、ゆうちょ銀行口座への振り込み内容(会員名と振り込み金額、振り込み日)の確認にかなりの時間と手間がかかることが問題となっております。

このため、会員の皆様には、会費納入の際には、三井住友銀行口座または郵便振替口座を、ご利用いただきたく、お願い申し上げます。万一、ゆうちょ銀行口座に振り込まれても、振込額が無くなるわけではありませんが、その場合には、事務局宛に、振り込みを証明できる明細をファクスまたはPDF等で送付いただきたく存じます。お手数をおかけしますが、宜しくご協力ください。

(2) メーリングリストへの投稿についてのお願い

学会ホームページのメーリングリスト案内に記載されているとおり、学会メーリングリストへの投稿は、会員が直接、メーリングリスト宛に投稿することになっております。事務局宛に送信していただくケースが多々ありますが、ご注意ください。また、リマインダは配信しないこととしております。

なお、電子メールの一般的な約束事でもありますが、投稿メールには、「転送

歓迎」「転送してください」など、チェーンメールを誘発するような文言は、記述しないようにお願い申し上げます。この点もご留意ください。

(店田 廣文)

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。これらの会員の連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただけますでしょうか。

伊藤 祥子	小野沢 透	柏原 弘明	唐鎌 圭彦	岸 真由美
北村 高	木下 宗篤	熊谷 哲也	黒田 努	座喜 純
佐藤 伸	佐原 徹哉	白神 小鈴	瀬戸 邦弘	宗野 ふもと
高木 小苗	高橋 陽子	高堀 英樹	武田 朝子	中川 喜与志
七尾 健太郎	畑中 美樹	樋口 義彦	日野 恵美	宮本 邦昭
桃井 治郎	森広 泰平	安永 真理	山下 真吾	山中 啓介
吉田 行香	依田 純和	和賀 えり子	Ali Abdullah Alkahtani	
Khan	Muhammad Modjtaba Sadria	Rochmat Saefur		
Azhar				
Samy Mohamad Soliman Ahmad				

編集後記

メーリングリストをみていると、中東研究者が着目している高名な研究者や著述家が次々と来日する。どれも行きたい、どれも行けない。本務校での仕事もふえるばかり。他方、《インド洋給油活動》はひっそりと終わった。この活動



に対する評価らしい評価はほとんど聞こえてこない。アメリカ国務省はイエメンに「テロ」の火種を見ているかのような発表をし、日本政府はジブチに大使館を新たに開設するらしい。自分がどこにいて、どこに向かおうとしているのか、情報の渦のなかで眩暈のするような思いがたつづく。鬼はどこにいるのか？

(山岸 智子)



会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2010年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMESに未送付分がある場合は、2009年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。また、中央大学における年次大会での研究発表やAJAMESへの論文投稿を予定されている会員の方は、是非とも会費納入を宜しくお願ひ申し上げます。請求会費額は2009年12月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

なお、事務局会計の運営円滑化のため、ゆうちょ銀行口座での納入はお控えくださいようお願いいたします。口座そのものは、存在しておりますが、ご協力のほど、お願ひ申し上げます（詳しくは、「事務局より」をご覧ください。）

日本中東学会ニューズレター 第120号

発行日 2010年1月28日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町513番地
早稲田大学120-4号館3階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付
日本中東学会事務局
電話/ファクス：03-5286-1966
Eメール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>
郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会 代表 長沢 栄治)